



亀虫のでんぐり返る乱世かな
 家の中まで枯れたるよ戦とは
 残菊やどこにも合はぬ鍵を持ち
 世の声を聴いてゐるなり秋の象
 正倉院の大鍋芋煮せしと思ふ
 菱の実が一番星の欠片らし
 鉛筆に詩囊宿るや霜の夜
 あらたかな葛根湯を賜りし
 大枯野煙は人を育て来し
 蛇穴にカードばかりが増えたるよ
 声楽家首どつしりと十月来
 ひとりとは一人のくらし冬はじめ
 玉廻しに逆らふ林檎ありにけり
 茸籠背負ひ獣の顔になり

*

栗原利代子
 矢島 恵
 岩井かりん
 佐藤 健
 福島米雄
 榎山洋子
 幹 自 聲
 塚原白里
 清水道径
 望月秀子
 中溝玲子
 横地妙子
 須田奈津子
 藤本光子

その墓の木犀の香に凭れをり
 満月の夜の乳房の張りにけり
 冬薔薇魂遠くなりけり
 棺の指われよりぬくし秋薔薇
 猪肉に里山の土薫りをり
 乾びゆく牛のへその緒秋の蠅
 無花果や子のなきことの運不運
 湿原や臀帖蜻蛉を呼ぶ漢
 匂ひなき今年藁積む牧夫かな
 家鳴りどんと雪雷ゆきがんなりの不意を打つ
 生と死のあはひ頻りに木の実降る
 じやがいものみな正直な顔しをる
 仕舞湯の底のぬるみて虫時雨
 奥伊予の砦づたひの兔みち
 強霜を踏めば聞こゆるよいとまけ
 美少女に藁の匂ひや小鳥来る

(田中正造)

滝澤あや
 田中優子
 曦 達久
 中岡草人
 池田康樹
 安原純子
 穂坂日出子
 川村五子
 比田井喜美子
 木村由里子
 村田朋美
 安部克詠
 手島 互
 松本よし乃
 山崎玉江
 長瀬冬嵐

はじめに。「岳俳句」を「岳半世紀へ」と歩みを新たにする意志を銘記した。五月に創刊四十周年を迎える年のはじまりにあたる。

俳句界が素人の時代に入った。なんでも俳句、好き勝手にことば遊びに興ずればいい、楽しければ結構という時代になりつつある。これはいいわるいの問題ではない。日本人総俳人という発想はわるくはないが、今年は、俳句とはなにかという面倒なことをみんなもう一度考える年にしたいものだ。

乱世とは

亀虫のでんぐり返る乱世かな 栗原利代子

身近に亀虫(椿象、悪臭を放つへくそむし)がふえている。冬近くなると窓枠の暖かいところにならずいる。すぐ六角形の亀型の体をひっくり返す。そのたびに悪臭を放つ。亀虫も乱世の演出に一役買っている。世の中の落ちつきない、そわそわした気分を捉えたものである。

家の中まで枯れたるよ戦とは 矢島 恵

中近東の戦場写真を見ることが多くなった。爆撃を受け、

昔話がありそうで、たのしいではないか。

鉛筆に詩囊宿るや霜の夜 幹 自聲

原稿書きは鉛筆という詩人や小説家もいる。私も選評は長い間鉛筆書きであった。鉛筆は、書いたり消したり自在がいい。万年筆やボールペンはどこか決めつけられて硬い。牧歌的な愉しさは木質の鉛筆でないと生まれない。霜が降る寒い夜は鉛筆の方から語り掛けてくれる。本来、俳句には鉛筆が似合うのであろう。

あらたかな葛根湯を賜りし 塚原 白里

今月の秀句

残菊やどこにも合はぬ鍵を持ち 岩井かりん

どうしてこんな鍵がまぎれ込んだものか。過去に勤めた会社の鍵か。鍵への思いはふしぎ。合わないといつてやたら捨てることができない。「どこにも合はぬ鍵」は、人間関係における心理的な不均衡な状態を比喻したものである。残菊が妙に実感がある。世の動きに巧みに合わせられない慙愧の思いばかりが残るくやしき。他人には話せない内心を秘かに一句に仕立てた心理詠として注目した。

破壊された家屋を見ると、こんなところにどうして住めるのかとふしぎになる。生活臭などどこにもない。瓦礫の山。なんのために戦いがあるのか、根本から考えさせられる。

世の声を聴いてゐるなり秋の象 佐藤 健

象の聡明さが秋の象で際立つ。秋は象にとっても、格別、気持の大きな余裕ある季節なのか。自然の野生育ちではなく、動物園の象であろうか、じっと耳をすました貫禄ある象の姿が見える。人間よりも象の方が一廻りも二廻りも大きな存在として、チマチマした人間は存在が薄い。

正倉院の大鍋芋煮せしと思ふ 福島 米雄

正倉院にある大鍋から上代の芋煮会を連想したもの。大鍋から一気に生活感が立ち上る。古も現代も人間の暮しの共通項を見つけ出す視点に作者の人間的な温みがある。

菱の実は一繁星の欠片らし 初山 洋子

菱の実の鋭い突起があり奇怪な形。繁茂した菱に覆われた湖は宵の明星、金星が星の欠片をこぼすものとの連想もおもしろい。菱の実がどこか星型をしているのも、そんな宇宙の

「葛根湯」は佐藤映一の句集名。漢方薬の風邪薬。葛根、麻黄、生姜など配合されたもので、名がどこかの山の湯治用温泉宿のような風趣。おもわず「あらたかな」と神々しい気分になったものか。純情な作者の人情が思われる。

大枯野煙は人を育て来し 清水 道徑

枯野から立つ煙の木質の匂い、なびく形の奔放さ、その淡い黄など、煙からは賢しさを感じる。なにも思わない人もいるであろうが、煙のふしぎさは詩人を育てるものかもしれない。古の狼煙は生きもののようだ。

蛇穴にカードばかりが増えたるよ 望月 秀子

なぜ「蛇穴に」か。私は知りませんよ、人間社会はやたらカードが増えて、カード倒れになりませんか、と呟いているようだ。作者は、つまらない世の中になった実感をもらしたものであろう。現金払いでなくカード、抽象化がすすむ。

声楽家首どつしりと十月来 中溝 玲子

十月は秋の音楽祭ばやり。声楽家の季節。「首どつしりと」がいい。大きな声を出すには、胸もばんばんと張っていないと見栄えがしない。首も太い堂々たる体軀がいい。脚も首も細い華奢好みの世の中へ立ち向ってこそ、芸術家。

ひとりとは一人のくらし冬はじめ 横地 妙子

拓くゝんば ③ 自句寸言(20)「初あら」

初あらし 胸乳かすかに樹下仏 昭和57年

「岳」(昭和五十七年十月号) 所載。信濃追分詠。泉洞寺の裏手に村人に歯痛を治す仏と慕われている一メートルほどの石仏がある。手を頬に当て歯痛を堪えている感じから信仰が生まれたものか。堀辰雄が短編に描いてから有名になる。森澄雄詠もある。わが好きな信濃追分風物の一つ。同時作に「屋根を掃くからまつ夏過ぎにけり」「伊勢みちに風のたちたる蜻蛉釣」がある。「樹下」所収。

信濃柿もろともに山寂びにけり 昭和57年

「鷹」(昭和五十七年十二月号) 所載。信濃柿は俗に小柿とい小粒、昔は渋を採るための木。或いは柿の台木にした。霜を浴びると黒ずんで甘くなる。戦後ひもじい頃は子供のお八つ代わりに食べたもの。源池の生家に近く、山石房明君の裏庭に大きな木があり登って食べた思い出がある。冬が到来、山は一斉に冠雪し厳しくなる。「樹下」所収。

盆過ぎの 畑へ火を入れ小諸人 昭和58年

「鷹」(昭和五十八年十一月号) 所載。湘子推薦句。盆が過ぎると、小諸の秋は早い。大根畑を作る。さつま諸畑に火を入れ燃す。手際いいことを「せっこういい」といった。浅間根腰の斜面畑が見え、懐かしい句。「春の

鹿」(富士見書房・昭和六十三年刊) 所収。

彼岸栗父のししむら不意に思ひ 昭和58年

「鷹」(昭和五十八年十二月号) 所載。飯島晴子激賞句。「八月十日父死す」と前書。寿台の自宅で逝去。喉頭癌だった。七十六歳。北信稲荷山町の海産物問屋八百彦再興を夢に見、行商に徹した苦勞の生涯。独特な整然たる字を書いた。母譲りで几帳面。一度一壘を守る父の野球を見たことがある。選手に憧れたものか。戦役にとられる寸前に終戦。漫画家の近藤日出蔵と学友が自慢の種。無口で内心を話すことはなかった。貧しい父を攻め続けた後悔の念が深い。「春の鹿」所収。

年の夜やポストの口のあたたかし 昭和58年

「鷹」(昭和五十九年三月号) 所載。大岡信『折々のうた』掲載。「鷹」への投句稿を出した折の句か。ポストの口がぽかとしていた感触が今もある。出した後は極楽気分。高柳重信「俳句研究」編集長への稿であったか。しばしば引用される句。「春の鹿」所収。

螢川妻子消えたるはずもなく 昭和59年

「鷹」(昭和五十九年十月号) 所載。当時は寿台の北西隅近く、野川に螢が出た。大学から久しぶりに早く夜八時頃帰ったが誰もいない。虚を突かれた不思議な思いだった。この句のようなやすらぎと不安との浮遊感がしばらくテーマになった。「春の鹿」所収。

一人になってみると、なんでも一人分。これが一人の暮しなのかと冬に入る自分をしみじみと省みたもの。釧路ではじめてお会いしてから何年であろうか。どうぞお大事に。

玉廻しに逆らふ林檎ありにけり 須田奈津子

まんべんなく日を当てるために林檎の玉廻しがある。玉廻しなど嫌だときからう林檎があるとおもしろい。やたら人間さまに勝手に廻されたくないという林檎に同情する。「玉廻し」とは、ユーモラスないい方だ。

茸籠背負ひ獣の顔になり 藤本 光子

「獣の顔」がいい。山へ入る茸採は窓の世界。藪を掻き分け、谷川を跳び越えて、沢山採る。上品に振る舞う場ではない。生きる迫力をしっかり捉えている。

以上の他に雪嶺集、前山集からの推薦候補作を掲げる。

滾る湯に入れし刃をもて猪捌く 大野今朝子
磐座に鯨の記憶木の実降る 黒沢 孝子
霜折れや布の吸ひ付くラシャ鉄 柳澤 和子
安曇村大地すれすれまで林檎 西村 節子
己が影霧を纏ひて失せにけり 荻原 昭廣

魂遠く

満月の夜の乳房の張りにけり 田中 優子

とりわけ女体は月の満ち欠けに敏感。満月の夜に乳房が張るとは若き女性の宇宙的な感度のすばらしさを見事に表現している。単刀直入だ。齡満ちれば、満月でも織月でももうびくともしなくなる。そんな一句はなかなかむずかしいが、掲句のような若々しさによって、本年度岳賞を受賞。

冬薔薇魂遠くなり にけり 曦 達久

冬薔薇の見掛けの美しさを保つだけの状態を「魂遠く」といったものか。本来、真夏に色香盛んな薔薇。いまや年中、咲きつづけることで、薔薇本来の個性が失われつゝある。ど

の花にもいい得るが、特に現代人好みの薔薇にこだわりたい作者の気持がわかる。十八歳の青年が持つ矜持の一句。作者も本年度岳賞を受賞。

棺の指われよりぬくし秋薔薇 中岡 草人

逝去直後か。故人のふくよかな指を「ぬくし」と称したもののか。作者よりも若くして亡くなったのであろう。「指」に注目したところ、指を用いた職業人、作者の境涯から思うと専門のマッサージ師であろうか。生涯使いつづけた指へのねんごろな一句を捧げて、悼句としたもの。敬虔な作者。

猪肉に里山の土薫りをり 池田 康樹

作者はどうにも一句に詰め込むことが多すぎる。いいたいことが沢山あるのであろうが、ことばで語らせるのでは

なく、ことがらに語らせすぎた。今月はそれを見事に克服した。大らかにいい句だ。猪肉に里山の土のにおいが漂うという。いきのいい猪肉はそういったもの。「薫りをり」が いい。

乾びゆく牛のへその緒秋の蠅 安原 純子

牛飼が牛のへその緒を詠う。作者の身辺も牛が身近なのか。堂々たる牛のへその緒一句。牛小屋に秋の蠅は珍しくないが、からからに乾びた牛のへその緒に止まる秋の蠅をしつかりと捉えた眼力に感心した。岡山勢の底力だ。

無花果や子のなきことの運不運 穂坂日出子

一人身もいれば、子のない夫婦もいる。なにが運がいい、運がわるいとは定め難い。十分にそんなことはわかるのであるが、子供のいないさみしさを甘い無花果を口に入れながらふと氣にしたものか。世の中は平等ではない。不条理に充ちている。運とはどうしようもない、不条理と思うばかり。

湿原や腎蛄蜻蛉を呼ぶ漢 川村 五子

漢を出したのか手柄。つがいの蜻蛉を手なづけている風狂者がいる。湿原の沼地は蜻蛉の繁殖地なのである。単なる風景句ではなく、アニミズムを連想させる人の描出が愉しい。

匂ひなき今年藁積む牧夫かな 比田井喜美子

「匂ひなき」にぎくりとした。今年の藁に生気がない。牧

み。

奥伊予の砦づたひの兎みち 松本よし乃

奥伊予へ行ってみたいものだ。土佐へ抜ける伊予からの道。「砦づたひの兎みち」の描写が完璧で、思わず私がそこにいま立っている幻覚に襲われたほどだ。秘境というほどではなくとも、ほっと氣持を平らにしてくれる光景に、これは単に風景を捉えたものではないとわかる。ふるさとの自然の真景を懐かしく描いたものか。

強霜を踏めば聞こゆるよいとまけ 山崎 玉江

今月の秀句

その墓の木犀の香に凭れをり 滝澤 あや

田中正造の墓詠。下野国小中村(栃木県佐野市)生まれの反骨の新聞人。足尾銅山鉍毒事件を明治政府に質し、明治天皇に直訴。天保十二年生まれ、大正二年逝去。墓に植えられた木犀の香が義人の高潔な生涯を暗示している。墓が木犀の香に寄りかかり凭れているとは、ユーモラス。故人にはそんな粋な一面があった。足尾銅山は慶長十五年(一六一〇)発見、幕府直轄の銅山。昭和四十八年には閉山。

夫が家畜用に藁を積みながら、藁一つにも今年の氣候変動を感じている牧夫像を詠ったのがよかった。

家鳴りどんと雪雷の不意を打つ 木村由里子

作者は雪国生まれと仄聞した。十日町、小千谷辺では雪迎えのかみなりを「雪雷」と呼ぶのか。家を揺すり鳴らすほどに突然、どかんと来る。「どん」の野太い音が実に効いている。童話も書く。地貌の捉え方に性根が据わっている。

生と死のあはひ頻りに木の実降る 村田 朋美

晩年という意識を「生と死のあはひ」といった。今年の秋をしつかりと実感したいという氣持。木の実降る句例は多い。掲句も類想感はあるうが、おのが生への愛惜の心が伝わ

じやがいものみな正直な顔しをる 安部 克詠

凸凹な馬鈴薯を「正直な顔」とみた。食物にも磨きをかけ、化粧の時代、じやがいもの呼称といい、化粧無用の鄙の薯への愛情がつわる。掘り出したばかりのじやがいも詠か。

仕舞湯の底のぬるみて虫時雨 手島 互

家族がみんな入った最後に浴した。「底のぬるみて」に時間の経過がわかる。しきりに虫が鳴いている晩秋の夜更け。入浴の一些事を詠いながら人生が伝わる。晩年の感じ。巧

霜の強い日に、どこからか井戸掘の「よいとまけ」の囃しを耳にした。子どもの日の体験か。働くことの大変さをそれとなく感じ出した頃か。素朴そのものの太々した土俗の声を捉えたところがよい。

美少女に藁の匂ひや小鳥来る 長瀬 冬嵐

「藁の匂ひ」は手品の切札のように、鄙びたイメージにも、それとなく品ある光景にも用いられる。掲句は秋たけなわの明るい鄙の幸せ感の演出。美少女・藁の匂ひ・小鳥来る、揃いすぎるほどのバランスのよさ。チェロ奏者作者の芸とみた。

上記以外の岳集推薦候補作を掲げる。

雑巾縫ふ卒寿の秋を惜しみけり	中條今日子
抽出に地糸嵩張る良夜かな	北沢 雅子
すぐそばに鳩の潜りて水へこむ	真弓ぼたん
ばった跳ぶ裏街道を跳びに跳ぶ	荒川 美恵
晩節の諦観叱る鴉高音	渡辺 秀雄
新蕎麦を吸ひ込む音に揺らぎなし	竹内 健
夕照を封じ込めたる吊し柿	稲垣 敏子
満月をわが子の如く鏡台山	畦上 文子
天高し楽しきことの目白押し	須藤 瑞枝